

市長臨時記者会見（2022年9月6日）

14時30分～15時00分  
横須賀市役所1号館3階 会議室A

### 「新港地区の新たなふ頭整備事業について」

#### 市長

本日は、急遽、お集まりいただきましてありがとうございます。

本日の案件は「新港地区の新たな埠頭整備」、いわゆる第2突堤の埋め立て事業についてです。

新規埠頭の整備につきましては、今年度から、速やかな事業着手に向けた調査を進めて参りましたが、当初予定していた最短のスケジュールで進めることが難しくなりました。このことの詳細について、ご報告をさせていただきたいと思っております。

ご案内の通り、横須賀港は、他港に比べ、時間的な優位性を持っています。ただ、埠頭の狭隘さや水深が浅いなど、現在、また将来的な物流ニーズに合致していないという課題を抱えています。

今回の新たなふ頭整備計画は、これらの課題解消を図り、将来の地域経済の発展に必要なものとして立案しました。

予定位置は平成町の地先で、面積は19.3ヘクタール、必要な土砂量は300万立方メートルになります。

今年2月には、「横須賀港長期構想」を策定し、新港地区の新たなふ頭整備については、その構想のもとに改訂する「横須賀港港湾計画」と並行して、事業着手の準備を進めており、工事着工まで、最短で3年程度、最終的な完成には10年かかる想定での事業計画となっています。

当然のことですが、新たなふ頭を整備するためには、大量の土砂が必要となります。

その量は、資料に記載のとおり、300万立方メートルで、想像することが難しいのですが、よく引き合いに出される東京ドームでいえば、2.5個分になります。

ちなみに、猿島の海上部の2個分の量とご理解いただければと思います。

その土砂については、計画当初、ここ数年間の横須賀港の取扱い土砂量など、約30万立方メートルをベースに、今後の関東圏における国土強靱化の工事等で発生が想定される土砂を期待量として加えた、約50万立方メートルを、年間の発生量とし、それを6年かけて埋め立てることを想定していました。

しかし、今年度に入って、当初計画を精査した結果、ベースとなる残土発生量が望めないこと、加えて、期待量としての土砂等についても、国など、様々な関係機関への調査を行ったところ、現時点では全く見込めないということがわかりました。

本事業では、令和 11 年からの土砂投入開始を予定していますが、以上のことから、必要となる土砂量確保の見通しが立っていません。

これによって、埋め立て事業が当初計画の最短スケジュールで進めることができなくなりました。

本日の会見は、大きな期待を寄せていただいた、港湾関連の事業者の皆さん、そして議会や市民の皆さんに、今の状況をすぐにお知らせしなくては、との思いで、開くことにいたしました。

このようなお知らせをすることに、市長として、忸怩たる思いであります。

ただ、ぜひ皆さんにご理解いただきたいのは、ふ頭整備計画を進めないということではありません。

整備に必要な「横須賀港港湾計画」の改訂を進めていくとともに、必要な調査も継続して行っていきます。

そして、一刻も早く、事業が進められるよう、副市長をはじめ、港湾担当部など関係する部局一丸となり、土砂の情報収集や土砂確保のための営業活動をこれまで以上に強い思いを持って進めて参りたいと思います。

また、今日の発表が、まだ把握できていない残土情報の呼び水になればとも思います。

繰り返しになりますが、新たなふ頭整備は、本市の将来の発展に必要不可欠なものと考えています。

私も、実現に向け、全身全霊をかけて参りますので、ぜひご理解をくださいますよう、お願いを申し上げます。

私からは以上です。

## <質疑応答>

### 記者

残土の発生が望めない理由を教えてください。

### 港湾企画課長

当初、見込んでいた残土量は、年間 50 万立方メートルとなります。

そのうち 30 万立方メートルについては、横須賀港で扱っている年間の土砂量の推定が約 20 万立方メートル。それに加え、工事が始まり、浚渫（しゅんせつ）等によって約 10 万立方メートルの残土量を見込んでいました。

また、残りの 20 万立方メートルについては、国土強靱化に伴う、河川の掘削等で発生する土砂を期待量として見込んでおりました。

しかし実際には、想定していたベースとなる 30 万立方メートルのうち、約 17 万立方メートルしか見込めていない状況となっています。

### 記者

その見込んでいた残土は市内で発生するものを投入する計画だったのでしょうか。

### 市長

横須賀市以外で発生した残土が約 20 万立方メートル、横須賀市へ排出されていました。それに加え、工事に伴う掘削により約 10 万立方メートル、あわせて合計 30 万立方メートルの残土を見込んでいました。

ところが、掘削以外の 20 万に関し、令和 11 年の時点において、環状南線をはじめ、近隣で掘削する土砂がなくなるという想定ができていませんでした。

また、さまざまな公共事業にて発生する土砂についても、想定していた量の確保が見込めず、不足する土砂を確保するため、関係省庁含め、さまざまところへ連絡をしましたが、どうしてもその目途がたたず、当初、想定していた、最短のスケジュールで進めることができなくなってしまったので、今回、ご報告させていただきました。

### 記者

先程、完成には最短で約 10 年、着工に約 3 年ということでしたが、土砂が不足することに伴い、完成・着工等の見込みはどのくらいになりますか。

### 市長

埋めたてる土砂がないことには、見込みが立たない状況です。

**記者**

既存の土砂だけで始めるということはできないのでしょうか。

**市長**

それは難しいと思います。

**記者**

事業の開始自体を準備が整うまで延期するということでしょうか。

**市長**

その通りです。

**記者**

計画が遅れることにより、どのような悪影響があると考えていますか。

**市長**

東京九州フェリーの件もありましたので、できる限り港湾関連の事業者の皆様にご理解とそれから便利に使っていただくため、早急に港湾ふ頭を整備し、使い勝手の良いところをしたいというお約束をさせていただきました。ただ、その信頼を裏切るとまではいきませんが、ある意味では、その結論を先送りにせざるを得なかったということは、お詫びを申し上げなければならないと思っています。

**記者**

このような土砂が不足するということは、横須賀に限らず、近年、よくある傾向なのでしょうか。

**市長**

おそらく全国的にそういう状況にあるのではないかと、推察はしています。

**記者**

着工が先延ばしになってしまったことに対する市長の受けとめと、今後のプラン等について改めて伺いたいと思います。

## 市長

見込みの甘さということを痛感しております。

横須賀発展のために、港湾関連の事業者の皆さんや市民の皆さんのために、港湾を整備するという計画を立て、現場も含めてスピード感を持って、進めていきたいと思っておりましたが、このような状況で、一旦、立ち止まらなくてはならないことに関し、忸怩たる思いと、市民の皆さんに対し、申し訳ないという気持ちでいっぱいであります。

## 記者

7年後の埋め立てに必要な土砂が不足するということが、いまわかったということですが、この計画が始まる前になぜわからなかったのでしょうか。

## 市長

当初より、30万立方メートル確保することは可能で、県内・外においても、さまざまな土砂があると当局が理解をしていました。そのため、当然、私もそのように思っていましたので、それを見込みの甘さと言われれば、本当にお恥ずかしい限りです。

## 記者

ある程度の見込みをたてるための土砂等の調査はせず、計画を立てたということですか。

## 港湾企画課長

ヒアリング等はありませんが、現在の横須賀港の実際の取り扱い土量から、基礎ベースとして30万立方メートル確保できると見込みました。その他20万立方メートルは期待値としています。

## 記者

ヒアリングをしていないということですが、本来、どのようなところに行うのですか。

## 港湾企画課長

国や県、大型の公共工事を行っている事業者等にヒアリングを行います。

## 記者

資料2ページ「土砂の調査先」に記載のある機関に本来、ヒアリングを実施すべきかと思うのですが、今回は行っていないということでしょうか。

**港湾企画課長**

はい。現在、港湾計画を改訂しているのですが、その計画の段階で、現在の取扱土量を基に推定をしているということです。

**記者**

これだけ大きなプロジェクトにも拘らず、ヒアリングを行わず、結構はっきりした段階になり、集まりませんというのはさすがにどうなのかなと思うのですが。

**市長**

おっしゃる通りであり、お恥ずかしい限りです。

それ以上でも以下ではありません。

大変失礼いたしました。